

〔書評〕
佐藤武義著

『今昔物語集の語彙と語法』

櫻井光昭

昭和四十年八月に発表された論文から、昭和五十七年十二月に発表された論文まで、全十五編を一書にまとめたのが、標記の本書である。その構成の概略を示す。

第一章 今昔物語集の国語学的研究の歴史と展望

第一節 概観と研究の歴史

第二節 大正年代の研究

第三節 昭和年代の研究

第二章 今昔物語集の語法と語彙

第一節 「活用語ナラ」について

第二節 「モシ」を伴う条件法

第三節 「くシテ」と「くケテ」

第四節 平家物語と本集の漢文訓詁語

第五節 陳述副詞「スコシモ」について

第六節 「和ラ」とその周辺

第七節 「目出」と「微妙」

第八節 類義語の一断面

第三章 今昔物語集の形容詞語彙

第一節 形容詞の用法

第二節 形容詞語彙の性格とその歴史

第三節 形容詞語彙の意味と用法

第四章 今昔物語集の文体からみた語彙

第一節 卷十六の語彙

第二節 卷十九の語彙

他に「索引」と「あとがき」がある。

第一章は研究史と今後の展望であって、第一節で今昔の解説・概観と研究前史に触れたのち、第二節で坂井衡平氏『今昔物語集の新研究』（特に第二章今昔物語集の形質の第一節一般的修辭論）を紹介、詳説して、今日の学問的水準からは瑕瑾がなくもないがと条件つきながら、「大正期の本集の国語学的研究として、緻密で鋭い洞察によって総括され、本集の研究が、この書によって始まり、この書によって一応の結論を得たということができる。この書が刊行されて以後、多くの研究者によってなされた研究の多くの着想・見通しが、本書にすでに触れられていると言って過言ではない」（一三ペ）と高く評価しているのは、当然のことのようでありながら、卓

見である。

この説明としては、たとえば、次の事例をあげるのが適當であろう。それは、坂井氏が指摘された和漢両文体の要素の混在についての研究（本書の研究でも、この両文体の存在の想定が常に根底にある）が深化したのち、記録体の要素の存在が峰岸明氏によって指摘され、その当時、今昔の国語学的研究に新風を吹きこんだが、その記録語の「間」の存在についても、すでに坂口氏が触れているといった事例である。

以後、昭和四十九年発表の論文・著書までが詳細懇切に紹介批評され、昭和五十年以降については、昭和四十一年から昭和五十七年までの論文・著書数についての考察と、昭和五十六年八月、馬淵和夫氏監修による『今昔物語集文節索引』が完結した事実に触れている。昭和五十六年（五十五年の誤植か）の論文・著書数が平均の七本を越えているのは、新しい研究発表者の出現によるとし、それ以前の研究は、芳賀矢一氏纂訂の『改訂今昔物語集』（大正十年完結）と、山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄四氏による日本古典文学大系『今昔物語集』（昭和三十八年完結）の刊行が国語学的研究の興る契機となり、さらに築島裕氏『平安時代漢文訓読語につきての研究』の刊行が、同じ概念を表す漢文訓読語と和文語の比較研究に明確な論拠を与えたと指摘している。

要するに第一章は、坂井氏の国語学的研究の面の再評価をはじめとして、綿密な紹介、的確な批評と展望が述べられており、今昔研究者の指針となっているのみならず、その姿勢は本書全体の論述に安定感を与えている。

第二章は「今昔物語集の語法と語彙」（以下、「今昔物語集の」は

すべて省略する）である。本書の標題と「語彙」「語法」の順が逆になっている理由は定かではないが、第二章のみがかならずしも本書の中心的存在ではないということと、より大きな理由として、第二章は「語法の研究」と「語彙の研究」の両者が収められ、第六節から第八節の語彙中心の研究から、第三章の「形容詞語彙」、第四章の「文体からみた語彙」の各研究に連続していく結構となっているためと推察される。これは原論文の発表年時をたどることによって、著者の関心のあり方の推移が語彙に傾いていったことが推測される。すなわち、語彙の研究の方に本書のウエイトはかかっていた。

著者の方法は漢文訓読語、和文語とすでに知られているものの分布検討とともに、ある語（あるいは語法）が前半に分布しているか、後半に分布しているか、そのどちらでもないかで、その位相を推定する。さらに、当該の用例の所在する説話を出典（漢文または記録体の文章）のある説話とない説話とに分類し、比較検討する。そして、出典のある説話の用例の方が漢文訓読語的傾向を顕著に示す事例をあげる。また、平安時代、および、今昔以後の中世（著者は院政期を、八したがって今昔もV中世に所属させる）の状況をも精査することが多い。

第二章「語法と語彙」のうち、第一節（第五節は語法研究が中心である。第一節では、シカルヲ、活用語十ヲモチテ（格助詞的用法）のほか、活用語十ヲを(イ)代名詞が受けるもの、(ロ)それと同等の内容を表す語・句に係っていくもの、(ハ)の変形）を漢文訓読語、(イ)接続助詞ヲを和文語、活用語十ヲモチテ（接続助詞的用法）を特定

の傾向なしとし、(4)(5)、いずれも、卷二十以前よりも、卷二十二以後（卷二十一は欠巻）に使用が顕著であり、漢文訓読語である(4)の多用は今昔の編者愛用の用法とした。

第二節では、仮定順接条件のうち、モシを伴うものを漢文訓読語、伴わないものを和文語と認定した。漢文訓読語のモシ型は、『太平記』を除いた軍記物では使用が低率で、和漢混淆文の要素としては入らないのかもしれないとする。

第三節では、形容詞連用形に、助詞シテ、テが接続したものを、それぞれ「〜クシテ」「〜クテ」で表すと、「〜クシテ」は漢文訓読語、「〜クテ」は和文語である。ところが、本朝世俗部においても、「〜クシテ」は三七％（八七ペ。後掲の数値によれば、二三％であるが、表5の分布と絶対数から見て著者の指摘そのものはゆるがなない）の高い使用率（クシテ型は天竺震旦部三五二例、本朝仏法部四四二例、本朝世俗部一〇五例。本朝世俗部のクテ型は三五六例）を示している。これは、「平安時代以降の仮名文・漢字仮名混りの文中で、漢文や記録体の翻訳や翻案の文章を除き、「クシテ」型が大规模に流入した最初のものであり」（七六ペ）、本集の編者による文章史上の新しい試みとする。和漢混淆現象の一つの出現についての指摘である。

なお、第一節のシカルヲ、第二節のモシ型は会話文においては、上位者が下位者に対して、ことさら改まった言い方や見下したような言い方（四一ペ。六六ペでは別の表現がとられている）に使用される傾向があるという。

第四節では、今昔を和漢混淆文の創始期の典型、『平家物語』を完成期の典型として一直線上に並べ、両者の言語の実態を明らかにす

る手がかりとして、平家と今昔の漢文訓読語の使用率を比較して、両者の特徴をとらえようと試みている。比較に用いた漢文訓読語は次の一九語である。

或は 願くは 豈に 何況や・況や 再帰格の「これ」を以て が故に(なり) に依て が為に(なり) に於て や否や「として」と「とて」〔桜井注、以下、「この前の語」が漢文訓読語、あとが和文語〕 「ずして」と「で」「くして」と「くて」 「もし〜ならば」と「〜ならば」 「といへども」と「ども」 「といふとも」と「とも」 助動詞「ず」の連体形「ざる」と「ぬ」 「如し」と「様なり」

右のうち、ヤ否ヤは今昔において会話文専用語として用例があるが、平家にはないと指摘している。『枕草子』一〇一段（御かたがた、君だち）や『沙石集』に各一例の用例があり、語の位相に関心が持たれる。ヤ否ヤを除いた十八語の比較検討の結論は、「本集の編者が本朝世俗部で試みた和漢両文脈の混合体が『平家物語』にそのまま受け継がれたものと考えられそうである。そして、和漢混淆文の典型と言われている『平家物語』は、和漢両文脈が対等な使用率で成立しているのではなく、その多くは、和文体が優勢で、その中に漢文訓読体が混在し、あくまでも和文体が主で漢文訓読体が従の文体を示していると言わざるを得ない」（一〇九ペ）である。穏当な結論である。そして、著者自身、本朝世俗部の文体と平家の文体が近いとしながらも、両者の対象は異なっており、その理由の説明は今後の課題であるとする。

第五節では、スコシモには、平安時代以来の肯定と呼応する和文語の程度副詞と、平安時代には劣勢かつ文章語として登場した、打消しを伴う陳述副詞があり、今昔では両者伯仲しており、のち、後

者が次第に優勢になっていき、上位者が下位者に改まった言い方で用いる場合があったと説く。そして、後者（陳述副詞）は、今昔全体に分布してかたよりがなく、漢文訓読語とは認められないとする。

なお、巻七の第三〇話、

多クモ有レ、少クモ有レ、

の「少クモ」はスコシモではなく、スクナクモのよみによるべきである。

第六節「第八節は語彙中心である。第六節では、今昔の和ラ（歌ラ・孺ラ・粟ラ・弱ラ）はヤハラ（発音はヤワラ）とよまれ、「源氏物語」などのヤワラと同一の新語で、日常語として十一世紀中頃ヤワラと交替し、今昔よりはるか後世にふたたびヤワラに取って替わられたとする。出典（前述）のある説話に和ラが存在する場合を検討して、著者は次のように説く。

一、「和ラ」の用いられている箇所は、すべて、原典にない、敷衍の部分であること。

二、その敷衍の部分には、宛字、接頭語、大字仮名書きなど、漢文訓読語には見えないものが用いられていること。

三、それ故、「和ラ」を他の原典不明の説話と同一のものとして扱うことができること。

三の『和ラ』を……の部分ばかりににくいが、「他の原典不明の説話の『和ラ』と」の意であろうか。

第七節は次章第一節の伏線をなす。今昔では、微妙を、語幹としてミメウナリと用いる場合と、メデタシと用いる場合とあり、後者は和文脈に主に用いられ、前者は巻二〇以前に多く、用例の存在す

る説話に出典（前述）のある場合は本朝仏法部のみで、記録語であることを思わせ、また、メデタシの表記には、微妙と目出があり、両者相補分布をなすと説く。目出シという表記が劣勢であるのは、今昔当時、当て字としてまだ一般化していないため、同意の漢語微妙をメデタシの当て字に使用したらしいという。なお、微妙の訓をメデタシと推定する際、例外としてイミジとする後出（二四三べ）の「微妙シクテ」（二四一三二）を掲げておくべきであろう。

第八節は、一と二に分かれている。一では、今昔の「美人」をめぐる類義語を調査し、漢語六語、和語九語を指摘収集して考察したもので、それらを体系的に明らかにし、新見に富む。たとえば、端正美麗とキヨゲナリが相補分布をなし（日本古典文学大系『今昔物語集二』補注参照）、前者は今昔前半に、後者は今昔後半に分布し、その下位表現では、端嚴とウルハシが相補分布に近く、美麗の圧倒的進出が目だつなどである。二では、今昔よりあとの中世の「美人」をめぐる類義語を考察している。今昔で優勢だった「美麗」の用法にかたよりが出てきたこと、ウ（イ）ツクシは男女ともに最高の表現で、キヨゲナリはその下位表現になっていることを指摘する。キヨゲナリが今昔の場合より表す美しさの程度が低下している現象は、敬語の優遇度低減の法則に似ておもしろい。また、美しい女の表現としては、「美人」が上位で「美女」が下位であるという指摘もある。

第三章「形容詞語彙」の第一節では、形容詞の用字法を扱っている。分析の方法は、『類聚名義抄』（観智院本）と『色葉字類抄』前田本と黒川本）の訓を基本とし、次のような考察を行っている。(1) 一つの漢字表記に一つの訓が対応するとみられる場合は、『色葉字

類抄』の掲出語第一位の漢字と一致する率が非常に高い。(2)一つの訓が複数の漢字表記に亘るとみられる場合は、四十九語を検討した結果、一訓に複数の漢字表記があつても、一漢字表記が多用され、そのほとんどが『色葉字類抄』の掲出語の第一位か第二位である。

(3)一つの漢字表記に複数の訓が想定される場合は、二十四組を検討した結果、その訓は現在の研究者の判断の多様性に起因している点が多い。(4)一つの片仮名表記と一つの漢字表記とが対応する場合は、該当するものは七語で、その分布からも、山口佳紀氏の説が首肯され、いずれも記録体で常用されている用字法の反映である。(5)片仮名表記のみの場合は、一五語(和歌中の用例として除外されたアカナシは形容詞ではない)で、そのほとんどが本朝世俗部に用いられ、かつ平安時代の和文にあるもので、和文語の性格を示す。(2)では、当然、漢字表記に対する検討が行われ、「悪」はニクシ、ワロシをしりぞけて、すべてアシでよいとか、「直」はナホシ一例を除き、ウルハシとよんでよいとか、情无の情はココロではなくナサケとよむといった著者の見解が豊富に示されている。また、ナシの漢字表記は無と無であるが、無は鈴鹿本には存在しないという興味深い指摘もある。

第二節は形容詞語彙の性格とその歴史である。今昔の形容詞四〇八語について、前代と比較し、また後代(現代をふくむ)に生き延びているかを克明に調査し、その実態を明らかにしたものである。

一は、その性格で、築島氏の研究に基づき、今昔の形容詞を、

I 漢文特有語

II 『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点』や『源氏物語』にも見えるもの

III 『三藏法師伝古点』などに見えないもの

IV 訓点資料や和文資料にも今昔より前に見えないもの

に分類して、『万葉集』や寿岳章子氏作成資料による中古・中世(室町時代)の形容詞語彙、あるいは現代語彙と比較検討したものである。Iは今昔でも少数であるが、平安時代の和文より使用率が高い。IIは日常生活における基本的な形容詞の性格を備えている。IIIは(イ)万葉から用いられているもの、(ロ)平安時代から用いられているものに分類すると、(ロ)は複合化した形容詞と接頭辞・接尾辞を加えた形容詞が多く、I IIや(イ)に比し、残存率が低い。IVは、今昔でも半数は一例の使用にとどまる語で、後世に残ることも少なく、今昔でも勢力を得るに至らない新出の院政期語と見られる。そして、今昔の形容詞語彙は、中世的な語より中古語的な語が圧倒的であるとしている。個々の語の位相にも綿密な注意が払われ、トモシが漢文訓読臭の強い箇所用いられる一例として平家と『方丈記』のほぼ同文の箇所を指摘する。二では、十一種(本文では『宝物集』脱落。表で補う)の説話文学作品、すなわち、『今昔物語集』『打聞集』『古本説話集』『宝物集』『発心集』『宇治拾遺物語』『選集抄』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』『雑談集』の形容詞語彙を比較考察したものである。今昔の四〇八語を筆頭に『打聞集』の七二語まで、一作品あたり平均約二五〇語が使用されている。全体の異なり語数は七七一語である。共通に用いられる語には単純形容詞が多く、基本語彙をなしている。これらの説話文学作品は、新しい形容詞を比較的多く登場させる傾向のものと、古い形容詞を比較的多く登場させる傾向のものに分かれる。また、世俗説話集は前代の形容詞にかたより、仏教説話集(今昔も、仏教説話が多いので該当)は新出の

形容詞を含む傾向が強い。才学ガマシ、廊メカシ、愛ラシなど、「漢語十ガマシ・メカシ・ラシ」の例は、前代に例のないものであるという指摘は新鮮である。新出の単純形容詞三三語が全七七一語に対して四・三%の比率を占めるに過ぎず、形容詞そのものの造語力も大きくない事実を認めつつ、院政期と鎌倉期の新出形容詞には著しい相違があるとする。

三では、二種の現代の形容詞語彙との比較を行っている。その一つは芥川竜之介作『儼盜』とその源泉と目される今昔の巻十九第三話ならびに第十二話に見られる形容詞の比較で、共通するものには単純形容詞が多いこと、芥川の作品に新出する形容詞の八割は複合によるものと接尾語ラシイを伴うもので占められていることを指摘する。接尾語ラシイを伴うものが目だつのは、あるいは芥川の個人的傾向という場合もあるのではないだろうか。他の一つは、前項二の説話文学の形容詞語彙七七一語のうち、どれだけの語が現代語に残っているかの考察である。単純語では七五・八%、複合語では三〇・五%が現代語に受け継がれている。結局、第二節全体の結論としても、単純形容詞（語彙）は基礎語彙で各時代を通じて変化することが少なく、複合形容詞（語彙）は二次的な存在であると同時に、その時代々々の新語を多く含むことになる。

第三節は「形容詞語彙の意味と用法」で、形容詞の類義語・対義語内における構造、語義の体系の把握のため、一温度形容詞、二アサシとフカシ、三タカシ、四ミジカシについて考察を試みたものである。一の温度形容詞は国広哲弥氏の現代語における体系図を参考に、今昔に中古の和文の資料を加えて考察した結果、体の一部に及ぼす感覚としてツメタシ、体の全部に及ぼす感覚としてサムシを対

立させて用いる以外は、ヒヤヤカナリ、スズシ、ヌルシ、アタタカナリ、アツシが体の一部にも体の全部にも両者兼用で体系をなしていることを明らかにしている。なお、これらの温度形容詞のうち、今昔に用例がないのは、ツメタシ（著者は冷をツメタシとよまない）、ヌルシの二語である。二のアサシとフカシは一次元の量を表すものだけを対象としている。今昔のアサシは基準面を水面・地面としてそこから下方への長さの小さな量を示しているとする。これに続いて、すぐ「フカシはアサシとは反対に基準面より下方に向つての、人体が没するほどの大なる量を示す」（三〇八ペ）とあり、フカシの用法はこれだけのように錯覚しがちである。さらに読み進むとそうではないことがわかるが、記述の方法をもう少し考えてはしなかった。また、「人体が没するほど」は「人体の全部または一部が没するほど」の方が明確になる。今昔の「雪フカシ」の用例を新出の用法とするが、今昔でも「雪タカシ」の用例が多く、一方源氏にも、

雪深くふりつみ、人めたえたる比ぞ、げに思やるかたなかりける。（源氏手習）

の用例がある。このタカシも一次元形容詞としての考察である。馬がけつまついた「大きな石」を「此ノ大路ハ極テ石高シ」（二二八—一六）と表現した用法は、現代語にない指摘している。四のミジカシでは、一次元形容詞一〇例を考察し、当時ヒキシが欠落していたため、ナガシだけでなく、タカシとも対立して「低い」の意味も表していたとする。『枕草子』の「短くてありぬべきもの」の「人の女の声」を低音と解する説は、新潮日本古典集成にも見られるが、珍らしい。

第四章「文体からみた語彙」についてはすでに与えられた紙幅に

達したので割愛する。筆者の短見から、思わぬ誤解のあることを恐れるが、著者多年の研究の成果が、このような形で刊行されたことは、現段階における『今昔物語集』の国語学的研究の概観を示すもので、今昔研究者に必見の書として大きな刺激を与えらるゝと思われ

(昭和五十九年五月三十日発行 明治書院刊 A5判 四四九頁
七八〇〇円)

——早稲田大学教授——

(昭和六十年二月二十五日 受理)